



大医は国を医す。

熊本大学内の小道をゆく。

大学病院前バス停から熊本大学病院側、左方向へキャンパスに入ると、レトロな2階建ての白い建物が目に入る。国の登録有形文化財(建造物)の山崎記念館である。

幾何形と円形が活かされたデコ調デザインを感じる昭和6(1931)年建造の鉄筋コンクリート建築のモダンな作りが印象深い。

もともとは昭和4(1929)年『肥後醫育史』を刊行した山崎正董博士・学長を顕彰し、多くの人の協力により熊本医科大学山崎記念図書館として建てられた。太平洋戦争の最中には空襲で大学校舎と附属病院は焼け落ちたが、奇跡的に本図書館は残った。戦後、熊本大学山崎記念館となる。

『肥後醫育史』は山崎の思いがとてもよく伝わる本である。宝暦6(1756)年の肥後藩の医学学校「再春館」創設話から始まる。国内初の公立の医学教育の始まりと、設立した細川重賢(8代藩主)の賢明さを誇らしく記している。

「すべてを世襲とする藩政時代に於て、独り医業のみは実力を以てその業を継がしめ・・・肥後の医学が当時に頭角を現したる所以である。」

また、校訓ともいべき「再春館壁書」についても記載がある。

「一、医の道は岐黄(伝説の帝王 黄帝と、伝説の名医 岐伯)を祖述し、仁術に本づく、故に尊卑を撰ばず、貧富を問はず、謝儀の多少を論ぜず、専本分を守るべき事・・・」

実に清々しい。医者になる者へ矜持をもたらす間違いのない遥かに高い志が宿っている。医育とはそういう心意気の基で取り組むものであろう。その志と出会えた医学生は幸せである。いや、すべての人へであらうか。

徳富蘇峰が序文を記している。

「・・・古い人の話に『大医は国を医(いや)す』と云ふ。我が山崎博士の如きも又たこれ医国者の一人であらう。」

医は万民に開かれ一人一人の苦しみを救うものであるのなら、やがて国をも幸に導くことになるであらう。社会すら治してしまいそうな山崎の大医の様相を感じる、そんな山崎記念館である。

キャンパス
ミュージアム
散策

絵・文
松永拓己
大学院教育学研究科
教授・芸術家

山崎記念館

〒860-8556
熊本市中央区本荘1-1-1
Tel.096-373-5988

外観のみ観覧可

交通機関: バス
大学病院前バス停下車 徒歩2分

